INTERVIEW

自治医科大学 学長
永井良三先生

【プロフィール】 永井良三先生　1974年東京大学医学部卒業. 同大医学部附属病院第三内科助教授, 群馬大学医学部第二内科教授, 東京医科歯科大学難治療疾患研究所客員教授などを経て, 1999年東京大学大学院医学系研究科内科学専攻循環器内科教授, 2003年東京大学医学部附属病院病院長, 2009年同病院トランスレーショナルリサーチセンター センター長を歴任. 2012年４月より自治医科大学学長に就任.

臨床から医学を作らなければいけない.

聞き手：山田隆司　公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

社会との接点を求めて医師の道を

山田隆司(聞き手)　今日は2012年４月から自治医科大学の３代目学長に就任された永井良三先生にお話を伺います. 永井学長, よろしくお願いします.

まずは, 先生が学長に就任されるまでのご略歴からお話しいただけますか.

永井良三　私は東京大学医学部出身で, 卒業後はアメリカのバーモント大学へ留学しました. その後も主に大学での医療に携わってきましたが, 臨床は好きですし, 大事にしてきました. 父親が開業の外科医だったので, 開業医や地域医療の世界は子どものころから身近な存在でした.

山田　お父様はどちらで開業されていたのですか.

永井　埼玉県の飯能市です. 私も小学校までそこにい

ました. 中学校から東京でしたが, 地元の医師会の先生たちとも顔見知りでした.

山田　そういう環境で育たれたので, 当然医師になる道を選ばれたのですね.

永井　初めは理工系へ進もうかと思ったのですが, 社会との接点という意味で医学の方が世界が広いという感じがしたのですね. 特に私たち大学紛争を経験している年代にとっては, 社会的問題を抜きにして学術や医学は語れないという感じでした.

山田　東大入試が１年なかった時ですね.

永井　私はその前の年です. 1968年ですから.

山田　本当に学園紛争真っ只中ですね.

永井　真っ只中です. 私たちは教養学部の１年生でしたからあまり巻き込まれませんでしたが, １～２年上級のクラスはすさまじい渦の中でした. 村上春樹や三田誠広が同じ世代なので, 彼らはよく1968年のことを書いています.

東大は紛争の影響で, 研修にもローテーションをいち早く取り入れました. 研修・入局のあり方が, まさに紛争の論点の一つだったのです. ですから私も卒業後２年間ローテーション研修を受け, ３年目に第三内科に入局しました.

山田　先生は循環器がご専門ですよね？ 第三内科というと血液とか内分泌というイメージがありますが.

永井　初めは私も何をやろうか迷いました. 血液や内分泌などアカデミックな研究にも憧れがありましたが, やはり臨床のフィールドが広い分野がよいだろうと思いました. それで循環器を選んだのです. でもそのころ東大の循環器は第二内科が主流だったのです. 第三内科は確かに大樹でしたが, 第三内科の循環器というのは傍流のさらに傍流という感じでした. その自由度の大きいところでのびのび研究したいと思ったのです.

東大病院での改革

山田　先生は循環器の研究に進まれて, その後東大病院の病院長に就任されたのですね.

永井　東大の病院長になってまず私は内科再編に着手しました. 病棟は「内科病棟」という概念で, 各科病棟の固有ベッドは６割としたのです.「何科の病棟」ではなく「何階の内科病棟」ということです.

山田　それを東大病院でするというのは大変だったのではないですか.

永井　どういうふうにしたかというと「科長は教授と必ずしも同じではない」としたのです. それまでは, 例えば循環器の教授に決まると循環器の科長になったわけですが, 科長は病院長の任命, そして１年任期としました.

山田　大学病院の臨床のミッションをはっきりさせたということですね. それはいつごろのことですか.

永井　私が病院長になった2003年, 独立行政法人化の前です.

山田　10年くらい前ですね.

永井　あのころは毎年赤字が50～60億円ありました. 法人化前は国が追加予算で補填してくれましたが, ところが法人化するとそれがなくなるので, きちんと自立しなければと考えました.

山田　先生が病院長として東大病院の運営に大ナタを振るわれたのですね.